現代の空間的移動と「移動可能性」概念に関する社会学的考察

～ウクライナ侵攻に伴う人々の「新たな移動」を事例として～

關根槙（菱山ゼミ）

目次

一章　はじめに

二章　現代モビリティ論の整理と移動可能性概念の拡張
（１）　アーリとカウフマンによる人々の移動の類型について
（２）　空間的移動における３つの対立要素
（３）　カウフマンの「移動可能性」概念
（４）　「資本」としての「移動可能性」

三章　人々の移動の歴史とアーレントの難民論
（１）　人々の移動の歴史
（２）　アーレントの難民論
（３）　移民と難民
（４）　国家と難民

四章　事例研究：ウクライナ侵攻に伴う東南アジアへの移動
（１）「移動可能性」からの考察
（２）アーレントの難民論からの考察
（３）小括

五章　おわりに

研究の背景

2023 年 2 月、バリ島を訪れた筆者は、急増する外国人観光客によって引き起こされる様々なトラブルを地元の日本人事業者から指摘された。インドネシア中央統計庁の発表によれば、2023 年 2 月の入国訪問者数は前年同月比で 60 万人以上増加している。さらに、現地在住者からは、増加する入国者に伴い、不法就労や不法滞在が問題視されていることも指摘された。

バリ島の入国管理局によると、不法滞在者の中には強制送還されるケースもあり、2023 年 1 月から 5 月までの期間だけで 123 人が本国に送り返された。これに加え、2023 年の初めから 3 月までにインドネシア全体で 620 人が不法滞在を理由に強制送還されている。本論文では、特にロシア人観光客に焦点を当て、彼らのバリ島訪問が新たな移動の形態であることを明らかにし、その問題点を分析している。

分析の枠組みと方法

本論文は二部構成となっており、前半では現代の移動（モビリティ）について理解するために、ヴィンセント・カウフマン（Vincent Kaufmann）が提唱したモビリティ論の概要を紹介する。特に、「移動可能性(motility)」概念を用いて現代の移動を包括的に分析する枠組みを提示する。また、移動可能性を構成する「アクセス(access)」「能力(skill)」「割り当て(appropriation)」の３つを、様々な資本と関連して発生する複合的な資本の一つとして捉えることで、その分配に格差があることを指摘する。後半では、東南アジ

ア諸国を訪れるロシア人に焦点を当て、彼らの移動が従来の分類に当てはまらない「新たな移動」の出現であることを明らかにする。この移動がどのように「新しい」のか、およびその発生メカニズムについて、「移動可能性」概念と、思想家の H・アーレントの難民に関する議論を用いて分析・考察する。

分析と考察

「移動可能性」からの考察

ウクライナ侵攻に伴うロシア人の東南アジアへの移動を「移動可能性」の視点から分析すると、カウフマンの概念が有益である。まず、「アクセス」に着目すると、2023 年 8 月以降のロシアでは国家による出国制限が厳しくなり、「アクセス」が制約された。特に、ロシア人の東南アジア渡航者は 2023 年 4 月 14 日までの出国を指す。次に、移動の「能力」に注目すると、ウクライナ侵攻によりルーブル高が発生し、ロシア人にはタイなどを含む東南アジア諸国への旅行が経済的に魅力的になった。富裕層の移動においては、「持ちうる環境と自身の能力をどのように使用するか」という、「アクセス」と「能力」の「割り当て」の検討が可能であり、不動産の購入や長期滞在が実現している。こうした分析から、移動者が保有する「アクセス」や「能力」が、移動の特性を形成していること、さらにそれらに変換することが可能である金融資本が、「移動可能性」に影響を及ぼすことを強調することができる。

アーレントの難民論からの考察

アーレントは自身の論考において、「国家」と「ネーション」に注目し、本来移動的である民族が国民国家という枠組みの中に定住的に固定されてしまっていることを指摘している。アーレントの難民論を移動可能性に関する議論に組み込むと、移動可能性資本を持つことは、国家とネーションに束縛されない移動を可能にし、人々を国家内の枠組みから解放する要素となることがわかる。ロシア人のウクライナ侵攻に対する反応は、自らの「ネーション」から離れ、移動可能性資本を利用して国家支配から解放された例と言える。この視点から見れば、移動者は単なる難民ではなく、国家の支配から逃れて再び移動的な存在へと回帰したと解釈できる。加えて、アーレントは、国家の束縛から解放されることで移動者が新たな社会問題を引き起こす可能性を示唆している。

小括

まとめると、ウクライナ侵攻に伴う東南アジアへのロシア人の移動は、移動可能性資本の存在によって特徴づけられる。これは、金融資本の不均等な分配が移動者の「能力」に影響を与え、難民と旅行者の二重の属性を持つ移動が発生した事例として見ることができるだろう。こうした、これまでの類型にあてはまらない人々の移動の急増は、オーバーツーリズムの問題を引き起こし、難民の発生と国際移動の複雑性が社会問題として浮き彫りになっている。ロシア人の東南アジアへの移動は、移動可能性資本が社会や経済に及ぼす影響を理解し、未来の移動の動向に備える上で注視すべき課題となっている。

主要参考文献

Kaufmann, Vincent, Manfred Max Bergman, and Dominique Joye, 2001, "Motility: Mobility as Capital", *International Journal of Urban and Regional Research*, 28(4), 745-756.

Arendt, Hannah, 1955, Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft, Europäische Verlagsanstalt, Piper.

河合恭平,2023,「アーレントの難民論とモビリティ―国家の定住性とネーションの移動性の不一致」『メディア・コミュニケーション』 (73) ,79-87

菱山宏輔, 2012, 「空間的移動に関する社会学的考察 ： 国境を越える移動・日常的な移動 V. カウフマンの『運動性』概念に関する試論」『経済学論集』（78）, 165-190.